

第 68 回加藤周一文庫公開講読会「『続・羊の歌』を読む」

——第十八章「AA 作家会議・前半」——

立命館大学博士後期課程

芥川 弘樹

【本章の概略】

一九五八年の第二回アジア・アフリカ作家会議に先立つ準備委員会参加のためタシュケントへ向かう。途上のカルカッタ空港では「通過することは、インドに入ることを意味する」という役人の言葉に翻弄され、ニュー・デリーでは旅券没収と宿泊拒否という事態に陥るが、インドネシア将校の善意に救われる。タシュケントでは「ソ連邦を見聞しようという途方もない望みを捨て」、社会主義の周辺地帯をていねいに観察する方針をとる。準備委員会ではアルジェリア・台湾問題をめぐる政治声明に対し、声明の内容ではなく準備委員会の権限と自らの代表性を問拠として署名を拒否する。郊外の「田舎の家」での通訳 M との対話に「魂の接触」を見出す。帰路に再訪したインドでは圧倒的な貧困に直面し、東西両陣営の政治言語への二重の否定で章は閉じられる。

第 1 段落

一九五八年の十月に、中央アジアのタシュケントで、第二回 AA(アジア・アフリカ)作家会議がひらかれた。ニュー・デリーでの第一回大会には、わが国から堀田善衛氏が出席した。第二回の大会には、伊藤整氏を団長として、日本の作家「代表」数人から成る団体が参加し、その国際準備委員会には、大会のおよそ一ヵ月ほどまえから、私が参加した。

○第一回アジア作家会議

- ・1956年12月、インドのニュー・デリーにて開催。
- ・1950年代、植民地支配から脱却しつつあったアジア・アフリカ諸国の連帯の機運が高まり、1955年バンドン会議（インドネシア）が開かれた。その中で、作家たちの間でも連帯が図られ、「第一回アジア作家会議」に至る。
- ・日本からは堀田善衛が参加。『インドで考えたこと』（岩波書店、1957年12月）を執筆。

○第二回アジア・アフリカ作家会議

- ・1958年10月7日から13日まで、ソ連のタシュケント（現ウズベキスタンの首都）にて開催。
- ・第一回アジア作家会議を引き継ぎ、ソ連中央アジア共和国およびアフリカ諸国の作家も加えた形で「アジア・アフリカ」作家会議に拡大された。
- ・参加メンバー
→伊藤整、三宅艶子、加藤周一、遠藤周作、中川正文、寺田信義、野間宏。

・加藤は「大会のおよそ一ヵ月ほどまえから」、すなわち 1958 年 9 月に準備委員会としてタシュケントへ向かった。

第 2 段落 前半

私には、その会議の用件から離れても、中央アジアとソ連邦を自分の眼で見たいという望みがあった。そのためには、団体で国際会議に出席するよりも、しばらくひとりでタシュケントに滞在した方が、はるかに好都合であった。身廻り品の小さな手荷物と二、三冊の本を携え、私は羽田からインド航空の旅客機で旅発った。カルカッタで旅客機を乗り換え、ニュー・デリーへ行き、そこでもう一度乗り換えて、タシュケントへ飛ぶ。インドは通過するだけだから、入国査証を必要としないだろう、と東京の旅行社はいった。しかしカルカッタに着いてみると、空港の役人が私の旅券をとりあげて、訛の強い英語で、「あなたはインドに入ることはできない」と宣言した。「インドに入りたいのではない、私は通過したいだけである」「通過することは、インドに入ることを意味する」。——というあたりから、いよいよ「アジア」がはじまるのを、私は感じた。正装した役人、その周囲に立ったり坐ったりしている半裸体の男たち、もの珍しそうに周囲を見廻している米国人の旅行者、途方もない熱気ともう憂げに天井で廻っている扇風機、ときどき中断されながら一時間以上も続く問答……要するに役人のいいたいことは、こういうことであるらしかった。東京—カルカッタ、ニュー・デリー—タシュケントは、国際線である。カルカッタ—ニュー・デリーは、国内線である。国内線への乗り換えは、入国手続きを必要とする。査証なしに入国手続きをとることはできない。「旅券はあなたがインドを退去するまであずかる。あなたは空港の外へ出ることができない……」という次第で、とにかく私は、国内線に乗り換え、夕方、ニュー・デリーまでゆくことができた。

○観察者の姿勢

・「中央アジアとソ連邦を自分の眼で見たい」

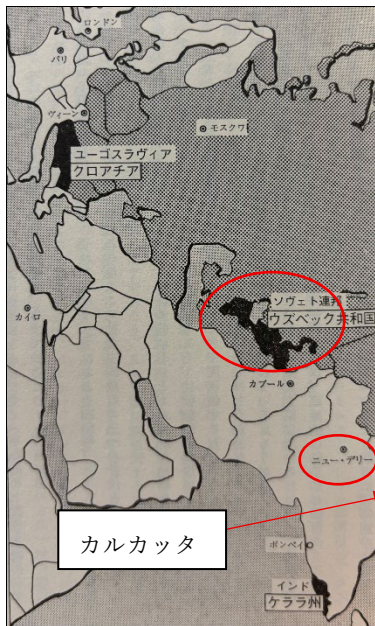
→加藤は「その会議の用件から離れても」自ら観察したいという意志を明記する。「団体で国際会議に出席するよりも、しばらくひとりでタシュケントに滞在した方が、はるかに好都合であった」という判断は、集団的参加者ではなく個人的観察者としての立場を選択することを意味する。

→「自分の眼で」という表現は、既存の政治的言語や陣営の論理によって媒介されない直接的認識への意志を示している。加藤にとって「観察者」であることは、いかなる集団的立場にも事前に拘束されないという認識論的条件であると言える。

○カルカッタ、ニュー・デリー

・1958 年 9 月、東京から香港経由、カルカッタとニュー・デリーをとおって、タシュケントまで飛んだ。²

² 加藤周一『ウズベック・クロアチア・ケララ紀行』（岩波書店、1959 年 8 月）



(『著作集 10』より引用)

○カルカッタ空港での逆説——「通過」と「入国」

・「通過することは、インドに入ることを意味する」

→「通過」と「入国」を区別する語り手の感覚は、トランジット・ゾーン³という近代的インフラに依存した特殊な「常識」にすぎない。その装置を持たない空港では、役人の言葉は論理的に正確である。語り手が「常識」と思っていたものは、特定の近代国家システムの産物にすぎないことを露呈する。

・「いよいよ「アジア」がはじまるのを、私は感じた」

→「アジア」の括弧は、「アジア」という概念を宙吊りにする記号である。日本人である加藤が「アジア」に他者性を見出す瞬間であり、観察者の複雑な自己位置が示される。

・「正装した役人、その周囲に立ったり坐ったりしている半裸体の男たち、もの珍しそうに周囲を見廻している米国人の旅行者、途方もない熱気とももの憂げに天井で廻っている扇風機」

→この描写は、整然たる役人・周縁化された半裸の男たち・異邦人としての米国人という層序を示し、脱植民地化途上のインドの制度と身体のあいだの裂け目を可視化している。

³ トランジットとは、航空機で目的国に行く途中、給油等のために一時他国の空港に立ち寄ること。乗客は空港外に出られず、空港外に出る場合には一時的な通過査証（トランジットビザ）が発給される。（『日本国語大辞典』）

○AA 連帯の理念と現実

「アジア」の連帯を謳う会議へ向かう途上で、語り手がまず直面するのは「アジア」内部の差異と摩擦である。入国審査という制度的な場面において、「アジア」を一つの政治的主体として語ることの困難はすでに露呈している。→「アジアとアフリカの一心同体をいうまえに、そもそもアジアが一心同体だろうか」⁴という考えが浮かぶ。

一方で、加藤自身は「AA作家会議の意味するもの（上）」（『毎日新聞』1958年11月6日）において次のように書いている。

アジア・アフリカの諸国民自身がそれぞれの歴史的文化を内側からみてそれを世界的な文化の問題とする仕事は、むしろこれからのことである。みようによっては、こんどの作家会議はその一步をふみだしたものであり、その意味でも歴史的な事件だといえるだろう。

つまり加藤は AA 作家会議の意義を全面的に否定しているわけではない。カルカッタの場面が示しているのは、連帯への「批判」というより、連帯の「困難さの体感」である。

第2段落 後半

空港での問答数時間、翌日のタシュケント便が出るまで、街へ行き宿をとる許可証をもらって、旅館の受付に辿り着いたときには、深夜になっていた。そこで受付が、「あなたを泊めることはできない」と勝ち誇ったようにいった。部屋は前払いで、旅行小切手は、旅券がなければ、受けとることができないという。「両替えの店があるか」「この時間には閉まっている」「明日店の開くまで支払いを延期できないか」「前払いでなければ、泊められない」私は途方に暮れ、疲れきって、「アジア・アフリカ」と私自身を呪った。悲惨の心情は、おそらく顔色にもあらわれていたのだろう。折から勢よく乗りこんできたインドネシア将校の血気盛んな一団のなかから、一人が私に近づいて来ると、憐れみの言葉をかけた。「どうかしましたか」。私は手みじかに事情を説明し、彼はインドの通貨で一晩の部屋代を払ってくれた。「困ったときには、相見互いです」。孤立無援の私はスカルノの軍隊の将校に救われたのである。部屋にあがってみると、大きな冷房装置が置いてあり、指針が《on》となっていたが、機械は動いていなかった。暑さは堪え難い。窓をあければ、真夜中の戸外は、室内よりも暑く、熱気が流れこんできた。私は冷房装置の指針を出たらめに廻し、あきらめて、《off》にした。すると驚くべきことには、機械が音をたてて動きはじめ、部屋は忽ち涼しくなった。何という国であるか！何という逆説的な機械であるか！

○「常識」の転倒と人間的連帯

・旅券を没収され、旅行小切手も使えず、ホテルに泊まれないという重層的な制度の罨。「アジア・アフリカと私自身を呪った」という自嘲は、理念と現実の落差への率直な反応。
・しかしそこに救いをもたらすのは、インドネシア将校という「アジア・アフリカ」の人間である。「困ったときには、相見互いです」という言葉は、制度的連帯ではなく、個人

⁴加藤周一「アジア・アフリカ作家会議から帰って」（『文学』1959年4月）

の善意による人間的連帯の可能性を示す。

・「《off》にすると機械が動きはじめた」という冷房装置の逆説は、カルカッタ空港の「通過＝入国」と同型の逆説として機能している。制度・論理・機械、いずれもここでは「常識」を裏切る。

第3段落

翌日の朝、タシュケントへ向う機上から、私はパンジャブの緑野が眼下に遠ざかるのをみつけ、一種の解放感を味っていた。空は晴れ、旅客の少い大型機の内部は快適そのものであった。やがてパキスタン北部の山岳地帯があらわれ、それがアフガニスタンの岩山へそのまま続いていた。山頂をかすめて先へ進めば進むほど、水も樹木もみえず、人跡はいよいよ稀に、重畳する岩石だけが涯もなく拡っている。中央アジアの無慈悲な自然、遊牧民の古代、その地の涯に、あるいはむしろ歴史の涯に、タシュケントの「現代」は、降って湧いたように突然私の眼のまえにあらわれたのである。空港には、ジェット旅客機がならんでいた(一九五八年の秋に、ジェット機を定期便に使っていた国は、世界中にソ連邦しかなかった)。街には義務教育や病院や電話やジャーナリズム——要するに東京に備っているあらゆるものが備っていた。最初の社会主義国の印象は、インドの後では、万事がほとんどヨーロッパと変らぬということであった。

○「歴史の涯」に出現するタシュケントの「現代」

・「その地の涯に、あるいはむしろ歴史の涯に」

→「地の涯」から「歴史の涯」への言い換えは、加藤が眼下の風景を地理的に見ているのではなく、時間的・文明史的に見ていることを示す。パキスタンの山岳地帯からアフガニスタンの岩山へと続く「水も樹木もみえず、人跡はいよいよ稀」な荒野は、文明以前の時間、あるいは文明が届かなかった時間として把握されている。そしてその「歴史の涯」に、タシュケントの「現代」が出現する。

・加藤周一『ウズベック・クロアチア・ケララ紀行』(岩波書店、1959年8月)にも対応する記述がある。

翌日の朝早く、インド航空の旅客機が晴れわたった青空へ舞いあがったときに、私は旅の疲れと共にニュー・デリーの一夜を忽ち忘れてしまった。飛行機旅行では何もみることができないというのは、半分ほんとうだが、半分まちがいである。そのとき窓外に、——または窓下に、展開した光景は、革命まえの中央アジアそのものに他ならなかった。そしてやがて数時間の後に革命後の中央アジアが眼のまえにあらわれたのである。私は歴史の上をとんだ。四〇年の社会主義的建設を私はみた。それは何千メートルの高空から一目でみわたせるほどの大規模なものであり、際立ったものであり、ほとんど劇的なものであった。

→16章「外からみた日本」では、ヨーロッパから帰国するのに船旅を選択した。驚嘆力はその理由を「ヨーロッパから船旅で帰国すれば、アジアのあちこちの港に寄港することに

なる。わずかな時間といえども、その地を見ることができる。すなわち「アジアも見たい」という欲求が叶えられるからではなかったか」⁵と指摘している。

同じ「アジア」だが、「AA 作家会議」では船旅とは異なる視点で眺める。空からの視点によって、中央アジアと目的地であるタシュケントまでを歴史としての大きな時間のなかで捉えている。

○「現代」と「ヨーロッパ」という比較基準

・「最初の社会主義国の印象は、インドの後では、万事がほとんどヨーロッパと変らぬということであった」

→タシュケントを測る基準が「ヨーロッパ」であることは、加藤の視点の位置を示している。この基準は第4段落で直ちに相対化される。

第4段落

しかしもちろんタシュケントがモスクワではなく、中央アジアがソ連邦の辺境にすぎないということを理解するのに、ながい時間はかからなかった。まもなく私はソ連邦を見聞しようという途方もない望みを捨て、社会主義国の周辺地帯(ウズベック共和国)をそういうものとしてなるべくていねいに見物し、後日社会主義圏の周辺ユーゴスラヴィア(クロアチア)を訪ね、できれば非社会主義国のなかでの地方共産党政権の実際(インドのケララ州)にも及びたい、と考えるようになった。私は偶然を好まない。もし私が旅行の見聞をもとにして「ソ連邦」を考えるとすれば、私がモスクワではなく、主としてタシュケントに滞在したということは、偶然にしかすぎないだろう。しかし旅行の目的が「社会主義の周辺」の比較考察であるとするれば、タシュケント滞在はその目的にとっては必然だろう。私はそういう考えを、とにかく実行に移し、「ウズベック・クロアチア・ケララ紀行」という本を、日本へ帰ってから書いた。読者は多くなかったが、それは私の書いた本のなかで、比較的多くの情報と比較的多くの考えのいと口を、圧縮して小冊子のなかで書きこんだものである。その後社会主義社会について考えるときに、私はいつも、その本のなかでの見聞から出発した。

○方法論の再定義——「途方もない望みを捨て」

・「ソ連邦を見聞しようという途方もない望みを捨て」、タシュケントを「社会主義の周辺地帯」として位置づけ直す。これは観察対象の範囲を、自分が実際に観察できる条件に合わせて修正したものである。「ソ連全体」という過大な目標を捨てることで、観察が実質的な精度をもつ。

⁵ 鷲巢力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか——『羊の歌』を読みなおす』（岩波書店、2018年10月）

・「なるべくていねいに見物する」

→「ていねいに見物する」とはただ観光することではない。『タシュケント 1958』（手帳・ノート）によると、加藤が、物価・賃金・工業統計・農業データ・メディア制度・教育統計を体系的に書き留めていることがわかる。たとえば以下のような数字が手帳に記されている。

- ・「自家用車保有者：2年前 30人→1959年 2000人」⁶
- ・「工業生産指数（1953年=100）：1948年 52→1957年 170→1958年推定 199」⁷
- ・「物価は日本の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 、収入は $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{4}$ 」⁸

こうした多角的な記録が「ていねいに見物する」の内実である。加藤がのちに「その後社会主義社会について考えるときに、私はいつも、その本のなかでの見聞から出発した」（本文）と書くとき、この実地調査の蓄積がその基盤をなしている。

・「偶然を好まない」

→偶然の経験を偶然のままに放置せず、それを何らかの必然的な意味連関の中に位置づけようとする意志。

○三項の比較構造——「周辺」を見ることの意味

- ・タシュケント（ウズベック共和国）＝社会主義国の周辺地帯
- ・クロアチア（ユーゴスラヴィア）＝社会主義圏の周辺
- ・ケララ州（インド）＝非社会主義国における地方共産党政権

→加藤がタシュケント・クロアチア・ケララを選んだのは、中心（モスクワ）を浮き彫りにするためではない。『ウズベック・クロアチア・ケララ紀行』（1959年）は次のように述べる。

社会主義革命は、進んだ資本主義国ではなく、資本主義的発展のおくれた地域、資本主義の「弱い環」または「周辺」におこったのである。（p.1）

すなわち周辺こそが社会主義の固有の実態が現れる場所であり、中心の縮小版ではない。さらに加藤は、アジアにおける共産主義が西ヨーロッパのそれと本質的に異なることを指摘する。

⁶ 「2000 people have private cars in Zagreb. Two yrs ago 30 people」とある。加藤周一「Zagreb, 3- 1- 59」（『タシュケント 1958』663-26、立命館大学図書館／加藤周一文庫アーカイブ）

⁷ 「Notes」（『タシュケント 1958』663-35、立命館大学図書館／加藤周一文庫アーカイブ）

⁸ 「Notes」（『タシュケント 1958』663-35、立命館大学図書館／加藤周一文庫アーカイブ）

「西ヨーロッパでの共産主義の意味は主として富の分配にかかっていたが、アジアでの共産主義は主として富の絶対量をひきあげる手段として考えられているということである。
(p.7-8)

その根拠として加藤は以下の数字を示す。

アジア諸国（インド、パキスタン、ビルマ、インドネシア）の一九五三年の一人当り国民所得は、アメリカの二〇分の一、西ドイツの五分の一、日本の二分の一以下にすぎない。
(p.9)

所得の平均化だけでは貧困は解決されない。独立後のアジア諸国の目標は政治的独立から工業化へと移行している。

したがってタシュケント（社会主義国の周辺地帯）・クロアチア（社会主義圏の周辺）・ケララ（非社会主義国の地方共産党政権）という三項は、中心を照らすための装置ではなく、それぞれが固有の問題をもつ場として選ばれている。周辺を見ることは、周辺そのものを理解するためである。

○「偶然」と「必然」をめぐる自伝的意識

この段落は、『続羊の歌』という自伝の文脈で読むとき、さらに別の意味をもつ。

自伝とは、過去の経験を現在の視点から意味づける行為である。「私は偶然を好まない」という言葉は、自伝的記述の方法論的宣言でもある。偶然の出来事を偶然のまま記録するのではなく、それを思想的・認識論的な必然の連鎖として再構成すること——それが加藤の自伝の企てである。

カルカッタ空港の「事件」も、ニュー・デリーの一夜も、タシュケントの「現代」との遭遇も、いずれも偶然の出来事である。しかし『続羊の歌』という枠組みの中に置かれることで、それらは「観察者」としての加藤の思想形成の必然的な契機として意味をもつ。

「私は偶然を好まない」という一文は、したがって、この章の一節であるだけでなく、自伝というジャンルへの加藤自身の自覚的な態度表明として読むことができる。

第5段落

準備委員会の宿舎は、タシュケントの郊外にあった。果樹園と畑のなかに、門構えの古風な一軒家があり、そこに準備委員会の「代表」と会議の事務局の人々が泊っていた。私の部屋は、二階にあって、窓をひらくと、庭の木立に集る小鳥の声が溢れるように入ってきた。天井の高い広い部屋の一角に作りつけの大きな暖房装置があり、寝台と机と椅子が置いてあった。私は毎朝ひげを剃りに階下の洗面所へ降りてゆき、同宿の誰かと顔を合せた。「今日は、昨晚はよく眠れましたか」というロシア語を私はそこで覚えた。その建物はもと大地主か貴族の別荘であったのだろう。革命の後に、いつ頃からか、作家同盟が作家の仕事場や外国人の客用として使い、「田舎の家」と称んでいた。広い構内には、いくつかの別棟もあって、その一つが私たちの食堂であった。私が着いたときに、準備委員会

の「代表」は、インドと中国から二人ずつ、モンゴール、タイ、ビルマ等から一人ずつ来ていた。後には、カメルーンの若い作家と、アルジェリアの代表だという人も加わった。会議の事務局は、モスクワの作家同盟から来ていた一人の書記と、三人の通訳。三人の通訳のうち、年輩の婦人は英語を話し、若い二人の婦人のうち、小柄な M は英語を、「蛙」とあだ名されていたもう一人はフランス語を話した。中国の代表団の通訳をしていたモスクワ大学の中国人留学生は、頭がよく、快活な青年であったから、忽ち「田舎の家」の誰からも好かれるようになった。その「田舎の家」から、毎朝、さし廻しの自動車に分乗して、タシュケント市内の会議場に向うのが、私たちの日課であった。会議はおよそ三時間。昼食には「田舎の家」に帰り、午後はまた会議場に戻って相談を続けることもあり、仕事を休んで近所の集団農場や町工場の見物に出かけることもあった。慌てず急がず、私はその一ヵ月ばかりの間、その「田舎の家」においてほど、のどかに牧歌的な生活を楽しんだことがない。

○果樹園の写真（右端加藤周一）



立命館大学図書館所蔵（管理番号 352）

○田舎の家

・「もと大地主か貴族の別荘であったのだろう。革命の後に、いつ頃からか、作家同盟が作家の仕事場や外国人の客用として使い、『田舎の家』と称んでいた」

→かつての特権階級の私的空間が、革命後に作家同盟の公的制度に接収され、今や多国籍の「代表」を迎える外交的空間として機能している。社会主義革命の軌跡が一軒家の来歴に刻まれている。

・「毎朝ひげを剃りに階下の洗面所へ降りてゆき、同宿の誰かと顔を合せた」「毎朝、さし廻しの自動車に分乗して、タシュケント市内の会議場に向うのが、私たちの日課であった」反復される日常の描写が、この段落の中心をなす。「毎朝」という語が二度用いられ、一定のリズムをもった時間の流れが示される。「慌てず急がず」という言葉がその時間の質を端的に表している。

○三人の通訳

→年配の婦人（英語）、小柄の M（英語）、「蛙」（フランス語）

○多国籍性の問題

・インド、中国、モンゴール、タイ、ビルマ、カメルーン、アルジェリア、ソ連、日本
→この多様な人々が「のどかに牧歌的な生活を楽しんだ」という事実は、公式の連帯の言説とは別の次元で、具体的な共同生活が成立していたことを示す。制度としての「アジア・アフリカ連帯」と、現実の「田舎の家」の共同生活の対比が、本章全体の構造的な軸をなしている。そしてその対比を加藤が意図的に配置していることは、この段落の牧歌的な語り口と、後続する会議場面の緊張した描写の落差によって表現されている。

第 6 段落

準備委員会の仕事は、事務的なものであった。宿舎の割りあて、食べものの配慮……
「日本の代表団の食べものについては、特別に考慮すべきことありや否や」（まずロシア語、その次に英語、その次にフランス語）私の答「無し」。これは何カ国語に訳しても、忽ち片づく。「インドの方はいかがでしょうか」。しかしインドの場合には、作家といっても誰が来るかによるのであり、誰が来てもそれぞれ時と場合によるのであり、外国人はこれを単に奇怪だと思うかもしれないが、事は複雑であって、これを理解するためには、歴史的淵源にまでさかのぼらなければならない、あわせて気候風土も知らねばならないという次第で、インド代表は、体験を語り、文明を分析し、説き去り説き来ってとどまるところがなく、要するに何を食べるのか、その英語の演説が、まずロシア語、その次にフランス語に訳されて後、先へつづくのを待たなければならない。私の隣に坐っていたカメルーンの青年は、たまりかねていった、「これだからアジア人には閉口する。全くレスプリ・カルテジアン(デカルト的合理の精神)が欠けている！」。

○文章の構成

→日本代表の答「無し」は一行で終わる。インド代表の答は、すべて読点でつながれた長い文章として展開される。「説き去り説き来ってとどまるところがなく」という表現によって、インド代表の演説の終わりのなさを文体そのものが再現している。カメルーン青年の批判が短い直接話法で落ちる。

→①簡潔、②冗長、③批判 の三部構成。

○「レスプリ・カルテジアン」の問題

・「これだからアジア人には閉口する。全くレスプリ・カルテジアン(デカルト的合理の精神)が欠けている！」

→加藤はこのカメルーン青年について、「アジア・アフリカ作家会議から帰って」（『文学』1959年4月）に次のように書いている。

彼は会議の、殊に委員会での、アジア各国代表の発言に、合理的精神が欠け、話の段落がはっきりせず、横道に逸れることが多いといていた。／——同じことをもう少し短く出来ないものだろうか。デカルト的精神がないね。／むろんあるはずがなかった。それはアジア・アフリカ作家会議で、デカルトはアジアの人間ではない。しかし黒人アフリカの人間でもないだろう。そういうときの彼は、全くパリジャンだった。

カメルーンはフランスの植民地であった。旧宗主国の思想的基準をもってアジア人の「非合理」を批判するという構造は、脱植民地化の会議の場において植民地主義の文化的刻印が植民地出身者自身の口から発せられる、という事態を示している。

・「作家といっても誰が来るかによるのであり、誰が来てもそれぞれ時と場合によるのであり」

→これはインドの宗教的・カースト的・地域的多様性の現実を指している。インド代表の「冗長さ」は、単純化を拒否する姿勢の表れとも読める。

→「非合理」に見えるものが、実は別の合理性をもつ——カルカッタ空港の逆説と同型の構造がここにもある。

第7段落

大会の議事日程・議題の詳細は、各国の「代表」が到着してから、代表団長の集りが決めるだろう、ということになった。どこの国の、誰に招待状を出すか。これにはいくらか面倒な問題も絡んでいた。イスラエルはあきらかにアジア・アフリカ地域に含まれる。招待しないのはおかしい。しかしイスラエルの作家が一人でも出席する会議には、アラブ諸国の代表が参加しないという。どうしたらよいか。……しかしそういう問題の大部分については、私に格別の意見のあるはずもなかった。

○「連帯」の論理が生む排除

この問題の構造は、「連帯」という概念の内部矛盾を露呈している。

イスラエルはアジア・アフリカ地域に地理的には含まれるが、招待すればアラブ諸国が不参加となる。「連帯」は包摂と排除を同時に行わざるをえない。「アジア・アフリカ」というカテゴリーが「反植民地主義」という政治的立場で定義されているがゆえに、イスラエルの位置づけは会議の自己定義に関わる問いとなる。

(メモ) 1958年の国際政治状況の概括

- ① イスラエル建国(1948)とその後の第一次中東戦争、そして1956年のスエズ危機(第二次中東戦争)が直近の出来事として存在している。スエズ危機においてイスラエルはイギリス・フランスとともにエジプトに侵攻した。この事実は、アラブ諸国にとってイスラエルを「植民地主義の共犯者」と見なす根拠となっていた。
- ② バンドン会議(1955)においてアラブ諸国はすでに参加しており、その場でパレスチ

ナ問題が議題として取り上げられていた。AA 連帯の文脈において、アラブ・イスラエル問題は会議の成立当初から内在する亀裂であった。

- ③ 加藤がタシュケントに滞在していた 1958 年秋、第 9 段落に示されるように中国は台湾海峡で金門島を砲撃していた。東西冷戦と脱植民地化の政治が複雑に交差する時代状況の中で、このイスラエル問題は生起している。

・加藤周一「A・A 作家会議の意味するもの（上）」（『毎日新聞』1958 年 11 月 6 日）

周知のように旧植民地または現在植民地であるアジア・アフリカ諸国が、世界の歴史に積極的な意味をもちはじめたのは、主として第二次戦後全く最近のことである。しかしいままでのところアジア・アフリカ諸国の役割は、政治的な面に大きく、文化的な面では限られたものであった。その文化は、いままで外部から評価され、そのかぎりでもかろうじて世界の文化のなかに位置づけられてきたといえるだろう。アジア・アフリカの諸国民自身がそれぞれの歴史的文化を内側からみてそれを世界的な文化の問題とする仕事は、むしろこれからのことである。みようによっては、こんどの作家会議はその一步をふみだしたものであり、その意味でも歴史的な事件だといえるだろう。／しかし政治的独立をまだ獲得していない諸国、ことにアフリカの植民地で、作家の関心が政治的独立に集中するのは、当然である。会議の内容を圧倒的に支配していたのは、反植民地主義の立場であった。そのなかである代表の発言は単なるスローガンの反復にすぎず、また他の代表の発言は植民地主義と国民文化の関係を具体的に説明して教えられるところが多かった（以下略）

○「格別の意見のあるはずもなかった」

「どうしたらよいか。……」という問いが三点リーダーとともに宙吊りにされることは、問題の解決不可能性を示す記号である。1948 年のイスラエル建国、スエズ危機（1956 年）、バンドン会議（1955 年）におけるパレスチナ問題の議題化という文脈を踏まえれば、この問いに安易な答えを与えることはできない。加藤は答えを持たないのではなく、答えを持たない問題として提示しているのではないか。

第 8 段落

しかし問題は、大会の準備とは関係のない面でもおこった。その頃カイロにアルジェリア臨時政府が成立し、その政府を全面的に支持するという声明を、AA 作家会議準備委員会の名で出そうと、誰かがいい出した。賛否が分れ、私は反対した。準備委員会は、大会の技術的な準備を仕事とする。アルジェリア臨時政府の支持は、必要ならば、大会が決議するだろう、というのが私の反対の理由であった。その声明は行われなかった。

○アルジェリア臨時政府

アルジェリア独立運動（FLN）は 1954 年から続いており、1958 年 9 月にカイロでアルジェリア臨時政府（GPRA）が成立したことは、脱植民地化の文脈において重大な出来事で

あった。

○反対理由の構造

「準備委員会は、大会の技術的な準備を仕事とする。アルジェリア臨時政府の支持は、必要ならば、大会が決議するだろう」。

→声明の内容への反対ではなく、声明を出す主体の権限への異議申し立てである。加藤は「アルジェリア臨時政府を支持すべきでない」とは言っていない。「準備委員会がそれを決定する権限をもたない」と言っている。この区別は、第9段落の台湾問題でも反復される。加藤の反対論拠は一貫して、声明の内容への異議ではなく、その声明を出す主体の権限と自らの代表性への問いとして構成される。

・第7段落の「私に格別の意見のあるはずもなかった」というイスラエル問題への留保と合わせて読むと、加藤の姿勢が一貫していることがわかる。自分が代表できない問題については発言を控え、準備委員会の権限を逸脱する声明には明確に異を唱える。自らが代表できる範囲を厳密に見極め、その範囲の内側においてのみ発言するという一貫した原則が、ここに示されている。

→加藤周一「アジア・アフリカ作家会議から帰って」(『文学』1959年4月)

私は準備委員会で勇ましいことはいわなかった。日本の事情がそういうものではなかったからである。堀田善衛氏はニュー・デリーの第一回アジア作家会議に出席し、第二回のこの会議のためには国際準備委員会のいわば下相談にモウコウへ行っている。そこで堀田氏が勇ましいことをいわなかった。その後へ私が出た。私が準備委員会で日本の事情に則して行動できたということには、第一に堀田氏の積みかさねがあり、第二にソ連側の委員のその意味での理解があったということが、大きく働いていたと思う。

↓

○「A・A作家会議の意味するもの(下)」(『毎日新聞』1958年11月7日)

日本の作家と植民地主義との関係は、大部分のアジア・アフリカ諸国の作家の場合と逆であり、いわばそれを裏返したものである。我々は国の外から来る植民地主義と相対してきたのではなく、国の内側にある植民地主義と相対してきたのだ。

→日本の立場の特殊性を加藤は自覚しており、それが「勇ましいことはいわなかった」姿勢の背景をなす。